

## 春秋

被災地にある  
日銀の支店は修  
羅場である。泥  
で固まった紙幣  
とさびついた硬  
貨が、地面から

湧き出るように途切れな  
く持ち込まれてくる。汚  
れを落として1枚ずつ鑑  
定し、きれいな現金に交  
換する作業は、わずかな  
間違ひも許されない。

▼支店がない盛岡には臨  
時の窓口も開いた。「明  
日までに支払わなければ  
ならない」と、陸前高田  
から半日かけて大金をか  
ついで来た人がいた。一  
円玉ばかりの貯金箱を、  
涙目で差し出す子供もい  
る。これまでに計15億円  
分を引き換えたそうだ。  
金額の大小にかかわらず  
持ち主にとっては、どれ  
も大切なお金である。

▼震災は、お金の不思議  
を考える機会かもしれな  
い。冷めた物理学者の目  
で眺めれば、ただの汚れ  
た紙切れであり、腐食し  
た金属である。それが価  
値を持ち続けるのは、人  
々がその価値を信じて疑  
わないからだ。通貨の信  
用力のカラクリは、人間  
の心の内にある。世の中  
の全員が、共通の夢を見  
ているようなものだ。

▼その夢の現実感を日常  
の中で支えるのが、紙幣  
や硬貨の役割かもしれな  
い。時間と戦いながら、  
ピンセットを片手に現金  
鑑定を続ける日銀の職員  
は、通貨の価値を守る縁  
の下の方たちだ。荒れ果  
てた光景が世界に流れて  
も、円相場は崩れなかつ  
た。この国の現場がしっ  
かり機能していると保証  
する市場の声である。